

平安前期の相撲節

吉田早苗

Sumai no Sechi in the Early Heian Period

はじめに

- ① 相撲節の儀式構造
 - ② 相撲司の任命と構成
 - ③ 相撲司の役割
 - ④ 標
 - ⑤ 標と雑伎
 - ⑥ 相撲節の改編
- むすび

【論文要旨】

相撲節は八世紀前半に国家儀礼として成立し、平安末期の承安四年（一一七四）を最後に廃絶した。この中で九世紀末に儀式に大きな変化があったことが近年明らかにされた。それは親王・公卿・官人が左右の相撲司に編成され、相撲人とともに天皇に奉仕するという形から、左右近衛府が中心となって行事を行い、王卿は天皇とともに観覧する形に変化したというものである。

本稿では相撲司を手がかりに九世紀における相撲節の儀式の検討を行った。相撲司は通説と異なり、『弘仁式』『内裏式』の撰進などの儀式の整備が行われた弘仁―天長年間に改編され充実した。その後構成員の地位が高位化し、九世紀後半には最高位は参議から中納言となり、その上に親王の別当が置かれるようになった。相撲司の主たる役割の一つは、左右の方のシンボルである標を製作し、それを中核とした行列を構成し、儀式の場に入場することであった。標とは山形に中国風の飾りを施した構築物で、大嘗会の際に斎場から式場まで進む悠紀・主基の行列の中心で引かれる標と類似している。標が相撲節において重要性を持ったのは、相撲節が中国で漢代から行われ

てきた百戯大会を模することを目的としたためと思われる。これは皇帝の前で武芸・芸能などの多様な演技を見せる催しで、皇帝の権威を示すために行われ、相撲も百戯の一つであった。

弘仁―天長年間におけるこうした形式への相撲節の改編の際には、それまで七月七日節として相撲とともに行われていた詩宴を切り離し散楽などを行うことよって、百戯大会の性格を明らかにし、また左右の衛府の舎人による勝負という形式をとった。これは八世紀末から行われてきた、呪術性を帯びた節会の合理化・抽象化の延長上にあるもので、それまでの相撲節が持っていた従属儀礼の性格などはかなり希薄になった。

その後七月七日が国忌となり、相撲節が節日を離れて行われるようになった。そのため芸能大会の性格が強まり、天皇の権威誇示という改編の意義が曖昧になって、相撲司と標の行列も行われなくなり、芸能・相撲に深く関わる近衛府が運営にあたるように変化していった。